

目次

第一章 問題関心	1
第二章 先行研究	
第一節 婚活提唱の意図	2
第二節 意図しなかった婚活と人々の結婚に対する意識	3
第三節 ドラマ分析	4
第三章 調査	5
第四章 分析	7
第一節 メインストーリー	
第一項 婚活開始以前の主人公	8
第二項 婚活を始めるきっかけ	9
第三項 主人公の変化	11
第四項 メインストーリーの結末	15
第二節 サブストーリーを含めた分析	
第一項 婚活の内容	18
第二項 男性の社会的地位	18
第三項 婚活に積極的なキャラクター	19
第四項 本命の相手との結末	21
第五章 考察	
第一節 ストーリー展開	23
第二節 ドラマが発するメッセージ	25
参考文献・URL	27
巻末資料	

第一章 問題関心

日本における晩婚化は現在着実に進行している。平均初婚年齢は少しずつではあるものの年々上昇を続け、厚生労働省発表の人口動態統計によると、2014年に夫31.1歳、妻29.4歳に達した。晩婚化は晩産化・少子化につながるため国家にとっても大きな問題であるといえるが、女性にとって結婚・出産というのは、仕事はどうするのか、子どもを産める体なのかなど、大きな決断を迫られるものであり、簡単に対処できる問題ではない。

このような状況への対策のひとつとして婚活というものがある。婚活とは、結婚を目標に積極的に活動することであり、2007年11月雑誌「AERA」にて山田昌弘が結婚活動を就職活動になぞらえたことから生まれた言葉である。2009年にはユーキャン新語・流行語大賞にもノミネートされており、社会に婚活という言葉が浸透したのは最近の出来事ではないといえる。婚活という言葉が生まれてから10年近く経った2016年4月には、婚活を題材にしたテレビドラマが二作品放送されており、今なお人々の関心を集めているといえる。

本研究では、社会の状況を反映するもののひとつであるテレビドラマを分析することで、低調といわれつつ今なお関心を集める婚活や、晩婚化の当事者である独身女性が、社会にどのように捉えられ、どのように表現されているのかを明らかにしたい。

第二章 先行研究

第一節 婚活提唱の意図

第一章でも述べたように、婚活とはよりよい結婚を目指して合コンや見合い、自分磨きなどに対して積極的に行動していくことを「就職活動=就活」になぞらえて、2007年11月雑誌「AERA」にて山田昌弘が結婚活動を婚活とよんだことから生まれたことばである。婚活と名付けることによって山田(2010)は、日本においてあまりにも高くなった未婚率に対する世間一般の認識、未婚者自身の認識、少子化対策に当たる政府・自治体の認識と現実のギャップを埋め、結婚するためには積極的に活動しなければならないという現実を広めようとしたのである。山田の指摘する認識と現実のギャップは以下の通りである。

- 1、少子化の主たる原因が結婚の減少であることがなかなか受け入れられず、子育て支援のみ議論されている。
- 2、「未婚者が増える=結婚したくない人が増える」とされ、結婚したくても結婚できないという現実が認識されていない。
- 3、「女性は仕事をしたいから結婚しない」という説が存在するが、女性は仕事を続けようが続けまいが男性に経済力を求めていることは変わらない。
- 4、数多くの男女を出会わせれば好きになる男女が出てき、好きになれば結婚するという希望的観測のもと出会い事業が行われている。

そして、山田が婚活ということばによって明らかにしたかった現実は二つある。一つ目は、待っていても理想的な結婚相手は現れないという現実である。1980年頃までは、職場結婚や見合いの斡旋が多かったため、待っていても結婚することができた。しかし、現代では何もせずに理想の結婚相手に出会う確率は低下している。現代は様々な領域で選択肢が増え、主体的に人生をプロデュースしなければならない。選択肢が増えることで、相手から選ばれないという苦しい状況に陥る機会も多くなり、待っていれば理想の相手が現れると信じたくなってしまふ。しかし、この現実を直視し、失敗を恐れず結婚を希望しなければ結婚は実現できないため、積極的に結婚相手の探索をすることを山田は推奨している。二つ目は、妻子を養って豊かな生活を送ることができる男性の激減という現実である。1997年の金融危機以降、非正規雇用者の増大、正社員でも雇用が安定していると言えず、収入が年功序列で増大するとは限らない状況になっている。そのため、「結婚後は主に男性が経済的負担を引き受ける」という結婚形態が実現する確率は低くなっている。共働きができる社会状況を整えていくことも重要であるが、男性は結婚後の家事・育児分担を、女性は結婚後も働くことを覚悟しなければならないとしている。

以上のような未婚者にとって直視したくない現実を明らかにし、積極的に活動することを推奨することが、婚活に込められた意図である。

第二節 意図しなかった婚活と人々の結婚に対する意識

山田(2010)は、婚活ブームにおいて意図しなかった状況が二つ起きたと述べている。一つ目は、婚活=合コン・結婚情報サービス産業の勧めという誤解である。このような出会いをもたらす機会を利用することは構わないが、婚活はただ出会いを増やせばいいというものではない。出会う前に自分を磨き、魅力を高めることが重要なのである。特に、男性はコミュニケーション能力、女性は経済力をつけることが大切である。また、性別役割分業意識から解放されること、お互いの希望を調整することも婚活に含まれている。そして、特に強調していたのは、出会いを自分で作り出すことの重要性である。「合コンに出れば出会える」「結婚情報サービスに登録すればよい」といったような、本来の意図とは異なった意識が芽生えていると指摘している。二つ目は、婚活=高収入男性を早くゲットする勧めという誤解である。婚活を提唱した本来の意図は、性役割分業で全員がうまくやっていくのは難しく、共働きをしていくという覚悟を特に女性に求めるものであった。しかし実際には、「このようにすれば高収入男性と結婚できる」というようなマニュアル本も多く、婚活をすれば数少ない高収入男性と結婚できるといった幻想が生み出されてしまっているのである。このように、理想と現実のギャップを認識し、自分で結婚できるように活動していくという本来の意味とは異なった状態で、婚活が浸透しているのである。

では、このような状況の中、人々は結婚に対しどのような意識を持っているのだろうか。永久ら(2015)は、2013年に独身男女を対象に行った Web 調査より、「経済的に楽になる」「家事が楽になる」などの道具的価値は、結婚によって得られる価値としての認識は高いものの、結婚意欲や活動の動機づけには結びつかないことを明らかにした。対して、「寂しさから解放される」「一人より二人で生きていく方が安心」などの情緒的依存対象を得られる価値は、結婚意欲や活動の動機づけを高める価値であるとした。また、婚活が低調な理由として、結婚が自己責任になっている社会の現状と結婚観との間にずれが生じている可能性を指摘している。婚姻率の高かった 1970 年代までは、結婚適齢期になれば、親戚や会社の知り合いなどから相手を紹介され、特別な努力をせず待っているだけでも結婚相手とめぐりあうことができていた。しかし、次第に「結婚は誰もがするもの」という規範が緩み、結婚時期も多様化していったことで待っていても結婚できる時代は終わりを迎え、自分で行動を起こしていかなければ結婚できない社会になった。このような現状にも関わらず、「いつかは自然に結婚できるもの」という結婚観を持ち続け、積極的に行動を起こすことができないため、婚活が低調なのではないかと述べている。

第三節 ドラマ分析

テレビドラマを分析する意義について、阿部(1997)はテレビドラマにおける物語の展開や物語の構造の変化を探ることによって、大衆文化上に現れる時代の変容の過程を明らかにすることが可能であると述べている。

これをふまえ、富士井(2006)は「時代の流れの中でのヒロインたちの変化を読み解いていく」「数あるドラマの中の代表的な作品のドラマ全体を眺めていく」という二つのアプローチによってドラマの傾向を分析し、女性の価値観について考察した。一つ目のアプローチは、1998年～2006年に放送されたドラマを対象に、「20歳以上の独身女性が主人公または同等の扱われ方をしている」「主人公が恋愛をし、結婚を意識する段階にある」「結婚経験・出産経験は不問」「学園もの、ミステリーは除外する」という条件のもと28作品を選び出し、ヒロインが抱える葛藤の種類、結婚に対するアプローチという二つの観点から分析した。分析の結果から、富士井(2006)は、ヒロインたちの葛藤が複数の男性の中からパートナー選択するというものから、「仕事と男性」、そして「仕事と自分の信念」という葛藤に変化していったこと、そして結婚に対する態度はこの8年間では一貫して妥協する結婚は描かれず、結婚そのものの描写自体も取り上げられなくなっていると指摘した。

二つ目のアプローチは、ヒットした代表的な三つの作品(『ロングバケーション(96)』、『やまとなでしこ(00)』、『プライド(04)』)をとりあげ、物語の展開・構造の共通性、登場人物の相関関係の共通性を分析した。分析の結果から、富士井(2006)は、時代を超えても変わらず愛されるのは現代版にアレンジされたシンデレラストoryであるとして指摘した。現代版シンデレラストoryとは、ヒロインに愛情を選択させているようで、結果的にはうだつのあがらなかったヒーローが成長することで金と権力を手にする、つまり上昇婚の物語である。このことから愛する人と寄り添うということも重要であるが、やはり経済的豊かさや社会的地位のある男性の方がよいという女性の考えが読み取れる。

本稿では、富士井の調査を参考にしつつ、婚活をめぐる状況についてテレビドラマを分析することを通して考えていく

第三章 調査

今回の調査では、ドラマを実際に視聴して分析を行った。婚活という言葉が生まれた2007年以降に放送されたドラマから条件に合うものを選定し、さらにその中から、時代による偏りが出ないように四作品を選定した。選定基準は富士井(2006)のものに婚活に関わる条件を加え、以下のようにした。

- 1、主人公または同等の扱われ方をしている人物が20歳以上の独身女性。
- 2、主人公または同等の扱われ方をしている人物が恋愛をし、結婚を意識する段階にある。
- 3、結婚・出産経験は不問。
- 4、学園・ミステリーは除外。
- 5、主人公または同等の扱われ方をしている人物が婚活をしている。(追加)

以上の条件をもとに選定した調査作品の概要は以下の通りである。

『コンカツリカツ』

2009年4月3日～5月22日 金曜 22:00 - 22:45 NHK 平均視聴率 5.34%(出典:ビデオリサーチ。以下同様)

登場人物

町田 七海：主人公。39歳。営業事務。

松崎るり子：39歳。編集社勤務の副編集長。七海の同級生。七海に婚活を教える。

早野 美穂：29歳。るり子の元で働く派遣アシスタント。セレブ婚を目指す。

佐々木洋介：39歳。幼稚園園長。七海の大学時代の友人。バツイチ。

斎藤 誠：40歳。商社勤務。七海の合コン相手。ニューヨークに転勤予定のエリート。

工藤梨香子：39歳。専業主婦。七海の同級生。夫と離婚の危機にあり、七海の家を居候している。

『婚カツ！』

2009年4月20日～6月29日 月曜 21:00 - 21:54 フジテレビ 平均視聴率 10.6%

登場人物

雨宮邦之：34歳。商店街のとんかつ屋「とんくに」の息子。区の臨時職員。

深澤 茂：30歳。邦之の幼馴染。商店街で酒屋を経営。

飛田春乃：22歳。邦之の幼馴染。就活中。

村瀬優子：30歳。条件に合う男性を見つけるために積極的に婚活をしている。

金子杏里：35歳。邦之とヨガ合コンで出会う。

高倉真琴：30代？邦之の幼馴染。バツイチで2人の子どもがいる。婚活事業をする「ス

ターマリッジ」社長。

『デート～恋とはどんなものかしら～』

2015年1月19日～3月23日 月曜 21:00～21:54 フジテレビ 平均視聴率 12.5%

登場人物

藪下 依子：29歳。国家公務員。冷静で合理的かつ理論的。

谷口 巧：35歳。自称高等遊民の無職。母親に寄生して暮らしている。

島田宗太郎：35歳。巧の幼馴染。工務店経営。町内会長。巧のことを気にかけている。

島田 香織：宗太郎の妹。32歳。画家志望。巧に婚活のアドバイスを送る。

鷲尾 豊：依子の父親の部下。26歳。スポーツ用品メーカー営業部。依子に思いを寄せている。

『早子先生、結婚するって本当ですか？』

2016年4月21日～6月16日 木曜 22:00～22:54 フジテレビ 平均視聴率 5.58%

登場人物

立木 早子：主人公。34歳。小学校教諭。「大人になったら結婚するだろう」と思っていたらいつの間にか年を重ねていたが、特に焦ってはいない。

久我山ミカ：28歳。早子の同僚。合コンの幹事をするなど積極的。結婚願望が強い。

成増 梅子：37歳。早子の同僚。ヒモの彼氏との縁を切りたがっている。

羽村 舞：28歳。ミカの友達。OL。

赤坂亜衣子：26歳。風子(早子の妹)の夫の同僚。仕事はできるが彼氏がないので婚活をするために婚活同盟に参加。

三田風太郎：年齢？元獣医。鳥類学者。早子の実家の豆腐店に通う。調査のため世界各地を飛び回っている。

本調査では、主人公や主要登場人物、交際相手の婚活や結婚・恋愛に関するセリフや行動を抜き出し、ストーリーを追っていくことで、ストーリーの描き方や登場人物についてどのような特徴がみられるかを明らかにする。ストーリーの描き方については、主人公が婚活をするようになった経緯や婚活の内容、結末などを観点とした。登場人物については、恋愛観や結婚観とその変化を主な観点とした。

第四章 分析

分析を進めるにあたり、「本命」という言葉を用いるが、ここでこの言葉の定義をしておきたい。本稿では、調査対象とした主人公やサブキャラクターの交際・結婚相手のなかで、ストーリー上最も重視されているとみなせる人物のことを「本命の相手」と表現することにする。また、調査対象とした登場人物を一覧表にまとめた。表は巻末に資料として添付してある。青色は主人公、オレンジは主人公の本命の相手、黄色はサブキャラクターの本命の相手を示している。人物の並びは、女性は各作品の一番上にメインヒロイン、その下はサブキャラクターを登場順、男性はストーリーにおいて女性との交際・結婚に深く関わってくる順となっている。『婚カツ!』については男性が主人公であるため、一覧表とは別に、男性主人公の視点でまとめた表を用意した。登場人物の呼称については、ドラマ内での呼称に合わせることにする。

第一節 メインストーリー

この節では、各ドラマの主人公について分析を行う。主人公の言動を追うことで、各ドラマの中心となるストーリーはどのような道筋をたどっていくのかを明らかにする。

第一項 婚活開始以前の主人公

今回調査した作品は、今まで婚活に無縁だった主人公が、何らかのきっかけで婚活を始めるところから物語が始まる。この項では、婚活を始める前に主人公たちに結婚願望はあったのか、また結婚に対してどのような考えを持っていたのかについて分析を行う。

『コンカツリカツ』の町田七海(以下：七海)は、母親と以下のような会話を交わしている。

母：七海、あなた付き合ってる人とかいないの？

七海：いません。なんかめんどくさくない？付き合うのって。一から始めるんだよ？

母：めんどくさいって。結婚のこと少しは考えたら？もう40よ？

七海：まだ39です。

(中略)

母：結婚しないつもり？

七海：そんなことないわよ？いつかはするんじゃない？

母：いつかって？

七海：いつかはいつか。いい人がね、現れたらするんじゃない？

この会話から、七海は異性と一から関係を築き上げていくことに対し、面倒くささを感じていることが分かる。加えて、結婚願望がないとはいえないが、結婚に対する焦りは感じておらず、「いつかいい人が現れたら」と楽観的である。また、七海と同級生であり既婚者の工藤梨香子(以下：梨香子)と結婚について話している際、梨香子に「どうせ結婚するならいい人なんて言ってるから、今まで一人だったのね。」と言われ、「私はただしなかつただけ。今の生活捨ててまで結婚したいと思わない。」と答えている。以上より、七海は結婚願望がないわけではないが、自分にとってよほど「いい人」が現れない限り結婚するつもりがない女性として描かれている。

『早子先生、結婚するって本当ですか？』(以下：『早子先生』)の立木早子(以下：早子)の場合、職場の同僚に「結婚願望100%の好青年です」とお見合い写真を渡された際、「私は(結婚願望)100%ではないので。」と答えたり、久我山ミカ(以下：ミカ)に合コンに誘われ「結婚願望ゼロですか？」と聞かれた際も、「どうですかねえ」と濁していることから、結婚願望がないと断言はできないが、願望が強いわけではないことが窺える。また、親戚に見合いを勧められた際に、母親に対し「お見合いする気にはなったが、どうしても結婚したい訳ではない。でも、どうしても結婚したくない訳でもない。」と言っている。以上より、『コンカツリカツ』の七海と同様に、結婚願望がないとはいえないが、結婚に対して焦り

は感じていないということが早子の場合にもいえる。

『デート～恋とはどんなものかしら～』(以下：デート)の藪下依子(以下：依子)の場合、父親に「お前ももう 29 だし、知り合いの女性も結婚している。」と言われた際、「女性の自己実現は決して結婚して家庭に入ることだけではない。」と反発しつつも、「結婚したくないわけじゃないだろ？」と問われると、「それもそうね。国の少子化対策に貢献し GDP の低下を抑制したいという気持ちはあるわ。」と答えている。また、父親がセッティングした見合いが失敗に終わった際、落ち込む父親に対して「私もまだまだ結婚は考えていないから。」と声をかけている。以上より、結婚はまだ考えておらず、結婚願望がないわけではな

いが焦ってもいないということが分かる。

以上三作品における主人公は、共通して「結婚願望がないわけではない」「結婚は今じゃなくていい」という考えを持つ女性として描かれていた。対して『婚カツ!』の雨宮邦之(以下：邦之)には、結婚願望がないという結果であった。深澤茂(以下：茂)を含めた幼馴染 3 人で結婚について話している際、以下のような会話をしている。

邦之：いや別に結婚しなきゃ生きていけない訳じゃないし。第一そんな金ねえもん。

茂：俺はしたいなー結婚。でも俺も金ねえけどな！

邦之：一人でいるより金かかるんだもん、結婚式だ、新婚旅行だ、引っ越したっつって。どんだけ金かかんだよ絶対無理だよ。

春乃：確にお金がない男よりかある男だよな。

茂：えっそうなの!?! そうかな? だってそういうああだこうだを二人で乗り越えていくのが結婚なんじゃないの!?!

邦之：絶対疲れるぜ? だっていちいち合わせたりさあ、いちいち気遣ったりするわけだろ? ほら人間てそういう気分じゃないときだってあるじゃんか。(中略)それだったら一人の方が気楽でいいじゃないか。(中略)まあ(結婚)しないよね。つーか興味ないし。

以上の会話より、結婚に対して積極的な茂に対し、邦之は消極的であることが分かる。お金がかかることや、相手に気を遣わなければならないことなど、結婚に対してネガティブな印象を持っており、一人の方が気楽で結婚に興味もないと言っていることから、邦之には結婚願望がないといえる。

以上より、『コンカツリカツ』七海、『早子先生』早子、『デート』依子の三作品においては、「結婚願望が強くないはある」、『婚カツ!』邦之は「結婚願望はない」という結果であった。結婚願望の強さに差はあれど、結婚に対して消極的な姿勢が四作品の主人公に共通しているといえる。

第二項 婚活を始めるきっかけ

前項より、婚活を始める以前の主人公は、結婚に対して消極的な姿勢であったということが分かった。では、そんな消極的な主人公がなぜ婚活を始めるに至ったのだろうか。

物語上、特殊なケースも見受けられたが、四作品とも、本人の意思とは関係のないところで婚活が始まるという点で共通していた。『コンカツリカツ』においては、七海の年齢に対する「もう40歳なのだから」という言及が見られ、七海に対する圧力となっていた。しかし、年齢に対する言及よりも七海を婚活へ踏み切らせた大きな要因が二つある。一つは、母親が七海にだまって代理見合いに行ったことである。なかなか結婚しようとしないう七海を心配し、母親が代理見合いに参加したところ、「39歳じゃ無理よねえ」「価値ゼロだろう」と言われ悲しい思いをする。そんな母親の姿をみて「代理見合いなんてみっともない真似しないでよ！がつついてるみたいじゃない！」と怒る七海であったが、母親に「出産にもタイミングがあるし、親は確実に先に死ぬのにずっと一人で生きていくつもりなのか。」と諭され、ようやく結婚について考え始める。もう一つは、七海の住む家が売り払われることが決まり、家を出なければならなくなったことである。母親が単身赴任中の夫の元へ行くことが決まり、三か月後には家が売り払われることになっていた。そこで母親は、「結婚を本気で考えてみる」と言った七海に対して、「じゃあ三か月で結婚相手みつけてね。この家があったらいつまでたっても変わらないでしょう？」と、具体的な期限を提示する。以上のように、自分のことを心配するあまり代理見合いまで母親にさせている現実や、今の家にいられる期限を提示され追い込まれることにより、婚活をしている友人の松崎るり子（以下：るり子）に「婚活教育入門編」として教えを受けながら婚活を始めることになる。

『婚カツ！』においては、邦之が失業中に、「既婚者」という応募条件があるのを知らないうまま春見区役所少子化対策課の臨時職員の採用面接を受け、そこでとっさに結婚の予定があると嘘をついてしまう。すると「邦之が結婚する」と地元中に広まり、具体的な式の日取りなど架空の結婚話がどんどん進んでしまい、今さら嘘だったとも言えなくなり婚活をせざるを得なくなった。また、架空の結婚話を信じている父親の「お前と彼女の出会いは奇跡なの。奇跡を馬鹿にしちゃいけない。」という言葉を受け、「奇跡って信じる？俺もよくわかんないんだけど。だから、婚活してみようと思ってるんだ、本気でね。」と、婚活に対して前向きになっていく。

『デート』においては、父親の娘へ結婚を勧める発言や、「娘に最高の結婚相手を見つける」という亡くなった妻との約束を叶えようとしているものの、うまくいかず諦めかけている父親の姿を見て、依子は親孝行の一環として婚活を考え始める。このことは、そんなに結婚願望があったかと問いかける母の霊に対して、「お父さんが私の結婚を望んでいる」と答えていることから読み取れる。そして、再び見合い相手を連れてきた父親に対して「自分の結婚相手ぐらい自分で見つけられる」と発言し、結婚相談所に登録しに行く。また、依子と同じ年齢の頃には結婚も出産も終え、自分の研究室も持ち、研究者としても女としても依子に勝っていた亡き母に対する対抗心も、依子が婚活を始める後押しとなった。

『早子先生』においては、「今の生活に不満はないが、時々ふと寂しくなる」という共通

点を持った早子含め四人の女性で集まっていた際、結婚に対して積極的なミカが、「ここは、婚活同盟というのはどうでしょう。結婚に向かって歩いていきましょうよ。大切なのは、たった一人の運命の人をみつけれられるかどうかです。」と発言し、早子以外の三人に巻き込まれるような形で早子の婚活が始まる。婚活同盟とは、合コンに誘い合ったり、お互いに励まし合ったりして一緒に婚活を頑張っていくためのものである。

以上より、主人公は周囲の言葉や行動に流されたり、婚活をせざるを得ない状況に追い込まれたりすることで、本人の意思とは関係のないところで婚活を始めることになったといえる。

第三項 主人公の変化

この項では、主人公が婚活を始めたことで、どのように変化したのかを明らかにする。『婚カツ!』の場合、結婚をする気はまるでなく、採用面接でついた嘘を本当にするためという理由で婚活を始めた邦之であるが、しぶしぶ婚活を進めていくうちに、だんだんと婚活や結婚に対して積極的になっていく。父親の言葉を受け、婚活に対して前向きになる前は、「婚活なんて絶対やだよ」「がつついてるみたい」と非常に後ろ向きな態度であったが、合コンで出会った金子杏里(以下：杏里)と破局してからは、邦之の結婚に対する言動が変化してくる。例えば、婚活サイトで自分でも条件に当てはまるような相手を探したり、区の婚活相談窓口に来た結婚したくないという若者に対して「人との出会いは奇跡。奇跡が起こるかどうかはやってみないと分からない。いい出会いと悪い出会いに揉まれて成長していくんだ。」と自分の考えを力説したりしている。この点からも、邦之の考えが変わり、前向きになったことが伺えるが、邦之はさらに積極的になっていく。そのきっかけは、幼馴染で同僚の二瓶匠(以下：匠)や離婚後も2人の子どもを育てている高倉真琴(以下：真琴)の存在である。身近に結婚し、家族を持った存在がいることで、結婚や家族の素晴らしさに気が付き、「結婚なんていいことがない」という考えから変わっていく。例えば、既婚者である匠は幼い頃から気が弱く、困難なことからはすぐに逃げてしまう性格であった。しかし、妻の力になりたいと思い結婚し、家庭を守るために仕事をこなしつつ妻ともしっかりと向き合っている匠の姿を見て、「結婚ってすげえ！」と邦之は感動する。また、婚活パーティーで再会した真琴とは、邦之の勧める婚活事業を手伝ってもらうことで親交を深めていくことになるが、その過程で母親としての真琴を知ることになる。離婚してしまったものの、「結婚してよかった、家族って素敵だ。」と語る真琴を見て、邦之は「真琴がすごくいいお母さんで感動した。結婚っていいなあって。離婚した真琴がいうから説得力があつてさ。あの三人みてたら本当にいいんだなあって。」と、結婚の良さを感じている。このようにして、結婚に対してマイナスのイメージを抱いていた邦之は、匠や真琴の姿を見ているうちに考えを改め、結婚はいいものだと思うようになる。その結果、仕事を手伝ってもらっていた真琴に対し、「真琴の力になりたい、家族になりたい。」と思うようになり、自らプロポーズをするまでになる。結婚する気がまったくなかった邦之が、結婚や家族を素

晴らしいものだと思うようになり、誰の後押しもなくプロポーズをするまでになったというのは、かなり結婚に対して積極的になったといえる。

『デート』の場合、父への親孝行や亡き母への対抗心が動機となって婚活を始めた依子は、谷口巧(以下：巧)の生年月日や身長などのデータに惚れて、巧とデートをすることになる。デートを楽しむことはできず、苦痛な時間を過ごす依子であったが、巧と「結婚は契約であり、恋愛はいらぬ。」という考えで意気投合し、契約結婚に向けて契約内容を協議していくことになる。当初は、すぐにでも結婚して「父を喜ばせる」という目標を達成しようとする依子であったが、鷺尾豊(以下：鷺尾)に「デートをして苦痛な相手と暮らしている訳がない」と言われ、その意見に賛成している父親をみてからは、「デートを積み重ねながらお互いの事を知り合い、一緒にいて楽しいと思えるかどうかを確かめてから結婚に踏み切る。」と考えを改め、父親を納得させるためにできるだけ一般的なカップルがたどるような交際を進めようとする。交際を進める過程では、主に依子が先導して関係を深めようとしていることから、依子が結婚に向けて積極的に動いていることが分かる。そして、何度かデートを重ね、親戚へのあいさつも済まし、結納を迎えることになるが、ここで依子の積極性が向かう先が変化する。結納当日はバレンタインであり、依子は今までのバレンタインのことを思い出す。そこで思い出したのは、仲良くチョコを食べさせ合う両親の姿と、渡したいと思える人がいなくてチョコを持ち帰ってくる自分の姿だった。そして、今も変わらず、自分にはチョコを渡したいと思える人がいないということに依子はショックを受ける。ショックを受ける依子に対し、巧は以下のように声をかける。

依子： どうして涙が出るのか分かりません。

巧： ご両親がチョコを食べさせ合っていたのは夫婦だからではありません。愛し合っていたからです。結婚してなお恋をしているからです。涙があふれる理由は、たぶん君が本当にしたいことは結婚ではなく恋だからです。本当は人一倍恋を試みたいのに、恋がどんなものか知りたいのにできないから。(中略)僕と結婚するということは、もう一生恋はできないということだから。だから、泣いているんです。渡してきなよ(バレンタインチョコ)、君とちゃんと恋をしてくれる人に。

以上のやり取りのあと、依子は結納を取りやめ、ずっと依子に対し「結婚には愛情が必要だ、自分は依子が好きだ。」と言いつけていた鷺尾の元へ行く。そして鷺尾に、「精一杯努力しますので、私に教えてください、恋というものを。恋がしてみたいです。」と告げ、鷺尾と交際することになる。交際中は、鷺尾の趣味を勉強したり、鷺尾の好みのおしゃれをしたりして、鷺尾の彼女としてふさわしくなるよう努力をする。このように、今までは結婚という目標を達成するために努力を重ねてきたが、結納失敗後は、鷺尾と恋をするための努力に変化したのである。また、交際を進め、鷺尾からプロポーズを受けた際には、

喜んで受け入れ、さらに「恋とはすばらしいものです。」とまで言い、考え方が変化している様子が読み取れる。「まだ結婚は考えていない」と言っていた依子が、巧との結婚や鷺尾との恋をするために努力を重ねるようになることから、依子は結婚や恋愛に対し積極的になったといえる。

以上二作品においては、主人公は当初の受動的な態度から抜け出し、恋愛や結婚に関して積極的に動けるように変化したといえる。『コンカツリカツ』『早子先生』については、『婚カツ!』『デート』ほどの大きな変化はみられなかったものの、二作品同様、主人公が積極的に動くことができるようになるという変化が描かれていた。『コンカツリカツ』の七海は、婚活を始めた当初は知識もなく、自分の理想の相手を考えたこともなかったため、見当違いの相手をすすめられたり、相手から「条件に合わない」とふられたりと失敗を経験する。るり子を始めとする周囲のアドバイスもあり、自分はどんな人が理想なのかを考えつつ、徐々に自分なりに婚活を進められるようになる。そして最終的には、婚活で出会ったエリート商社マンである斎藤誠(以下：斎藤)と、大学時代の友人である佐々木洋介(以下：洋介)との間で揺れることとなる。斎藤とは合コンで出会い、斎藤から積極的なアプローチがあった。七海も斎藤のことを良く思っていたが、斎藤と結婚した場合、ニューヨークに移住し専業主婦にならなくてはならず、そのことが七海を踏みとどまらせていた。洋介とは斎藤と出会った時期とほぼ同じタイミングで偶然再会しており、友人として再び親睦を深めていた。七海は斎藤との結婚についても洋介に相談しており、洋介も「早く結婚しちまえ」と七海の後押しをしていた。しかし、七海が斎藤の趣味を勉強して愛される努力を始め、関係を深めようとするタイミングで、洋介の七海に対する好意が発覚する。「結婚して子どもも産んで、(親を)安心させてあげたいのに、決められない。」と悩む七海であったが、周囲の助けを借りながら、二人のうちどちらが良いのかを見極めていくことになる。具体的には、斎藤と洋介を同時にホームパーティーに誘ったり、夫婦生活をそれぞれ想像してみたりして、自分はどちらと一緒にいたいのかを考えていく。その間も七海は英語の勉強を始めるなど、斎藤との結婚を意識した行動をとっている。そして、考える過程では周囲の助けを借りていた七海であるが、洋介を選ぶという決断を最終的には自分で下す。以下は、七海が洋介を選んだ理由を語るシーンである。

七海：洋介に、家族が見えたんです。新しい家族。夫婦になって、子どもができて、それで、いつの間にか家族になって。そんな未来の姿が洋介に見えたの。その時、この先の将来を洋介と一緒に歩いていきたい、生きていきたいって、そう思ったんです。

以上より、斎藤と洋介との間で悩んだ末、自分なりの考えを元に結婚したい相手は洋介だと結論を出したのである。また、斎藤のプロポーズを断った後、洋介の元へ七海はプロポーズをしにいくが、先に洋介から「再婚を決めた」と告げられ、プロポーズは失敗に終

わる。洋介への気持ちを伝えることを諦めた七海であったが、加山省吾(以下：省吾)に「まだ籍を入れたわけじゃないからまだ間に合う」と背中を押され、もう一度プロポーズをしに行く。このことから、やや受動的な態度が抜けきらないものの、婚活開始当初と比べると、結婚に対して積極的に動くことができる女性に変化している。

『早子先生』の場合、職場の同僚に流される形で婚活を始め、複数の交際を経て、偶然出会った三田風太郎(以下：三田)からプロポーズを受けることになる。この三田との関わりの中で早子は次第に変化していく。厳密に言えば二人は早子の実家である豆腐屋で、店員と客として出会っているが、二人は忘れていた。店員と客ではなく、お互いをきちんと知ったのは早子の勤め先である学校である。早子の担当する生徒が瀕死のうさぎを学校に連れてきてしまい、そこで呼ばれた獣医が三田であった。診察のお礼として、早子の実家に招き食事をする事になり、そこで二人は意気投合する。後日、三田から「もっと一緒にいられたら、もっといろんな話をしたいと、本当はそう思いながら笑っていたんです。」という内容の手紙が届く。手紙を読んだ早子は喜ぶが、手紙の最後に「さようなら」と書いてあるのを見て、「あと五分一緒に過ごしていたら恋は始まっていた」と後悔することになる。早子は三田のことを好意的に思いながらも、再会するチャンスがないかもしれないにも関わらず、何も行動を起こすことができないまま、三田を見送ってしまったのである。こうして三田のことを諦めざるを得なくなった早子であるが、ある時、父親が実は三田と連絡先を交換していたことが発覚する。早子は妹に背中を押されメールを送るが、送信先を間違えており、それに気づかないまま、返事が来ないことを気にする日々を過ごす。そうしている間にも、婚活同盟の仲間は相手と巡り会い同盟を卒業していき、仲間の幸せを見守るばかりの早子であったが、研究で海外に行っているはずの三田が突然実家に訪ねてくる。驚いた妊娠中の妹が破水し両親と共に病院に行ったため、再会してすぐ早子は三田と二人きりになる。「妹が出産という時にお邪魔するのは申し訳ない」と三田は帰ろうとするが、二人きりになれたのはチャンスだと考えた早子は、「あと五分話しませんか。私、会いたかったです。」と三田を引き留める。そして、ここから再び交流を深め、プロポーズにつながっていくのである。他三作品と比べると変化としては小さいかもしれないが、以前は言い出せなかった「あと五分」という言葉を言えるようになったということは、早子にとっては大きな変化であるといえる。また、早子が仕事を頑張りたいと思っていることを理解していた三田は、プロポーズをなかったことにしようとする。しかし、早子は「仕事がなかったらあなたの元に走っています。」と、自分も三田と同じ気持ちだということを告げている。このように、以前言えなかったことを言えるようになったり、相手に自分の気持ちを伝えられるようになったりしていることから、早子も結婚に対して積極的に動くことができるようになったといえる。

以上より、作品ごとに程度の差はあるものの、主人公たちは婚活を経て、恋愛や結婚に対して積極的に動くことができるようになったという点が、共通して描かれているといえる。

第四項 メインストーリーの結末

主人公が本命の相手と結婚したかどうかについては作品によって違いがあるものの、婚活から離れて物語が収束するという点で共通していた。前項ですでに述べ重複する部分もあるが、各作品のメインストーリーの結末についてまとめておきたい。『コンカツリカツ』の場合、七海は婚活で出会い、積極的なアプローチを受けていた斎藤ではなく、偶然再会した大学時代の友人である洋介を選ぶ。斎藤とデートを重ねている期間は、「ほかにもっといい人があるかもしれない」と婚活を続けていた七海であったが、洋介のことを意識し始めてからは、合コン等に参加することをやめ、斎藤と洋介のどちらがいいのかを見極めることに専念している。最終的には好条件の斎藤ではなく、「家族がみえた」洋介を選び、プロポーズをするものの、洋介はすでに別の相手と再婚を決めていたうえ、「お前のこと好きだから、(自分以外の男と)幸せになれよ。」とふられてしまう。

『婚カツ!』の場合、邦之が担当する婚活事業が忙しくなり、幼馴染である真琴と再び親しくするようになってからは、邦之は婚活をしていない。仕事を通してさらに親しくなった真琴に邦之はプロポーズをするが、邦之のことを親友としか思えないと断られる。そして、最終的に邦之は幼馴染である飛田春乃(以下：春乃)と結ばれることになる。春乃は邦之にとって妹のような存在であったが、いつからか春乃は邦之に片思いをしていた。邦之と真琴が親しくしてからは、「自分では真琴にかなわない」と、春乃は片思いを隠すことに決めていたが、茂がうっかりばらしてしまい、商店街中に春乃の片思いが広まってしまう。妹のようにかわいがってきた春乃から、特別な感情を向けられているとは思ってもいなかった邦之は戸惑い、二人は気まずくなってしまう。気まずさに耐えられなくなった春乃が、片思いのことは忘れて兄妹のようだった二人に戻ろうと一方的に邦之に告げ、邦之はさらに戸惑うこととなる。しかし、これをきっかけに邦之は春乃のことを意識するようになり、自分の気持ちに向き合ううちに「もう春乃の兄貴でいたくない」と自覚し、晴れて交際をスタートさせることとなる。そして、商店街リニューアルオープン当日、スピーチにて公開プロポーズを行い、春乃もプロポーズを受け入れ二人は結婚することとなり、物語は終わる。

『早子先生』の場合、早子の勤める小学校に獣医としてやってきた三田が本命の相手となる。診察のお礼として実家に招いた際、三田と意気投合するものの、行動を起こすことができないまま、三田は研究のために海外へ行ってしまい、早子は三田のことを諦めざるを得なくなる。その後、合コンで知り合った喜連川隼人(以下：隼人)が早子に元に現れ、いきなりプロポーズをされたりデートに誘われたりすることになるが、早子にとっては三田のことを諦めきれないという思いが強くなるばかりであった。後日、父親が三田の連絡先を知っていることが発覚し、早子からメールを送ることになるが、三田からの返信を待つ間、早子は合コン等に参加しなくなる。そして、三田への思いを募らせていたところに、帰国した三田が早子の実家を訪ね、意図せず再会することになる。これを機に親交を深め、

ついに三田から「結婚しませんか、今。」と、メールでプロポーズされる。直後に三田が早子の元を訪ね、直接二人で結婚について話すことになるが、三田のプロポーズメールは誤って送信してしまったもので、本来するつもりではなかったのだと発覚する。以下、二人が結婚について話すシーンである。

(メールは削除したため、早子には送信されていないと思っていた三田。)

三田：メールは削除しましたが、気持ちは削除じゃないです。あの、気にしないでください。

早子：気にします。嬉しかったですよ。(中略)仕事、途中にはできないし、やめられないし。

三田：分かります。分かるから…削除、したんです。

(中略)

早子：そうじゃなかったら、来週の木曜羽田空港まで走ってます。あなたの元に走ってます!(中略)

三田：僕も、今の早子さんが好きなんで。今の早子さんが今の仕事辞めたら、今の早子さんじゃなくなるなあって、削除したんです。(中略)今は、無理ですね。僕も仕事を辞められませんから。

以上より、お互い相手と結婚したいという思いはあるものの、仕事を続けるためには今結婚するべきではないと考えていることが分かる。その後も二人はメールのやり取りを続け、将来的には結婚することを視聴者に想像させる形で物語は終了するが、物語中では結婚には至っていない。

以上三作品は、婚活以外で出会った人が本命の相手となり、『コンカツリカツ』『早子先生』は結婚に至ることはなく、『婚カツ!』のみ結婚に至るという結末であった。対して『デート』は、婚活で出会った巧と結婚を前提とした交際をスタートさせるという結末を迎える。一見、この作品のみ婚活が成功したように思われるが、ストーリーを追っていくと実際は異なることが分かる。結婚相談所を通して巧と知り合い、交際を始めた依子であるが、二度目の巧との交際を始めた時点で依子は婚活パーティー等に参加しなくなる。その後、「恋をしてみたい」という自分の気持ちに気が付き、鷺尾と交際を始める。同時に巧も幼馴染の島田香織(以下：香織)と交際を始めたため、依子と巧はお互いの交際がうまくいくよう、アドバイスをし合う関係になる。そのまま友人として関係を維持しながらお互い交際を進め、依子は鷺尾からプロポーズをされるまでになる。依子はプロポーズされた喜びを、居合わせた家族や巧たちに伝えようとするが、口から出てくるのは巧の話ばかりで、巧と口論に発展してしまう。その様子を見ていた鷺尾は、依子が本当は自分のことを好きではないと判断し、プロポーズを撤回する。佳織も依子と巧は相思相愛なのだと判断し、交際をやめようと言い出す。それを聞いた依子と巧は、「自分では相手を幸せにできないから、

君(鷺尾・香織)が幸せにしてあげてくれ！」と懇願する。お互いの幸せを願い、「自分が相手ではだめなんだ」と主張する二人を見て、鷺尾たちは「それが恋をするということだ」と二人を諭す。結果、「恋に落ちる相手は法則で決まっており、運命は変えられない。」とお互い恋に落ちたことを認め、再び交際をスタートさせる。

以上より、主人公は婚活以外で出会った相手、もしくは出会いは婚活であったが、婚活以外の接点を持ったうえで関係を深めた相手を、本命の相手としていることが分かった。また、主人公たちは結婚を意識する人ができた段階など、何らかのタイミングで婚活を辞めている。これらのことより、今回調査した四作品はすべて、物語の途中で婚活の要素が薄くなり、婚活から離れて物語が収束するように描かれているといえる。

第二節 サブストーリーを含めた分析

調査した四作品のうち、『デート』を除いた三作品においては、サブキャラクターの物語も存在する。この節では、主人公以外のキャラクターにも分析対象を広げ、サブストーリーを含めた分析を行っていく。

第一項 婚活の内容

第一章で述べたように、婚活とは結婚を目標に積極的に活動することであり、その内容は多岐にわたっている。ここでは、具体的に主人公たちはどのような活動を行っているのかについて分析を行う。以下がドラマ内で確認できた活動である。

『コンカツリカツ』：合コン、同窓会、シングルスバーに行く、結婚相談所に登録

『婚カツ！』：婚活パーティー、合コン

『デート』：結婚相談所に登録、婚活パーティー、お見合い(父親の紹介)、化粧の練習

『早子先生』：お見合い(親戚の紹介)、合コン、化粧の練習

実際の婚活では、多くの場合マッチングが行われている。マッチングとは、年収や趣味などあらかじめ自分の希望する条件を設定し、その条件に合う相手を探し出すためのものである。しかし、四作品中『コンカツリカツ』以外の三作品においてマッチングはあまり描写されておらず、主に合コンを行っていることが分かった。これは、合コンが異性を含めた友人関係の延長であり、明確に結婚を意識せずに済む場ゆえに、結婚意欲の低い者も参加可能である(永久ら 2015:66)という特徴が、第一節第一項で述べた主人公の消極的な姿勢とマッチした結果であると考えられる。また、「婚活＝合コン」という世間のイメージも反映されているのではないかと考えられる。

しかし、婚活とは合コンに参加するなどただ出会いを増やせばいいというものではなく、出会う前に自らの魅力を磨くこと、特に女性は経済力をつけることが重要であると山田(2010)は指摘している。経済力に関しては、登場する女性たちはほぼ全員(『婚カツ！』の春乃を除く)働いており、ある程度の経済力はついていると考えられる。しかし、魅力を高めるといふ部分に関しては、二作品(『早子先生』の早子、『デート』の依子)における化粧の練習をするというシーンのみであった。

第二項 男性の社会的地位

この項では、相手となる男性の社会的地位について分析を行う。もし相手の男性と結婚した場合、上昇婚・対等・下降婚のうちどれに当てはまるのか比較を行う。上昇婚とは、自分よりも経済力、社会的地位が上の人と結婚することであり、下降婚はその逆のことである。これを踏まえ、今回は「就業上の立場」「役職」「収入」を考慮して比較を行った。就業上の立場については、正社員>派遣社員>フリーター>無職とし、役職や収入は、明

らかな差がなければ対等とした。なお、年齢は考慮しないとした。比較の結果、成就したかどうかに関わらず全体で 27 組ある交際関係のうち、上昇婚は 3 組、対等は 13 組、下降婚は 7 組、不明 3 組という結果であった。つまり、上昇婚となる場合はほとんどみられず、対等もしくは下降婚の場合がほとんどという結果であった。山田(2010)は、婚活をすれば高収入男性と結婚できるという幻想がマニュアル本などから生み出されていると述べているが、今回調査した作品ではそのような幻想は描かれていないといえる。

第三項 婚活に積極的なキャラクター

各作品の主人公たちは、婚活に対して初めはあまり積極的でなかった。しかし、サブキャラクターの中には最初から積極的に婚活を行っていた人物がいる。その中でもストーリーに比較的深く関わっていた『コンカツリカツ』の美穂、『婚カツ!』の村瀬優子(以下:優子)、『早子先生』のミカについて分析を行う。美穂、優子、ミカの三人は結婚願望が強く、ドラマに登場する時点ですでに婚活を始めていた。ミカを除いた二人は、相手の男性に求める条件を具体的に設定しており、条件に合わない人とは会話もほぼせずに切り捨ててしまうなど、理性的に婚活をしている。ミカも、条件こそ設定していないが、「ぐっとこない男性とは連絡先を交換しない」としており、自分なりの基準を持って婚活をしている。そんな彼女たちも、最終的には相手が見つかり結ばれることとなるが、相手を選ぶ際、彼女たちにも変化があらわれる。『コンカツリカツ』美穂の場合、シングルスパーで出会った村尾高志(以下:村尾)と結ばれることになるが、村尾と出会った当初、美穂にとって村尾は完全に対象外であった。美穂はセレブ婚といういわゆる玉の輿を目指しており、村尾に対しては「年収は二倍でぎりぎりクリアだけど、セレブ婚には程遠い。村尾さんとは友達止まりかな。」と評価しており、美穂にとっての理想の相手ではないことが分かる。しかし、るり子の指示のもと雑誌のネタのために連絡を取り続けることになり、ある時から雑誌の企画として、村尾を魅力的な男性に変えるための指導をすることになる。美穂にとっては仕事上の付き合いであったが、指導を受けどんどん魅力的になっていく村尾を目の当たりにし、次第に惹かれていくことになる。出会った当初から美穂に好意を抱いていた村尾は、るり子からプロポーズに関する指導を受けた後、美穂にプロポーズをし、二人は結ばれることになる。つまり、美穂はセレブ婚という条件を捨てて、自分の恋心を優先したのである。

『婚カツ!』優子の場合、桜田周五郎(以下:桜田)とは婚活パーティーで出会うが、見た目で桜田がかなり年上であると判断できるため、早々に切り捨ててしまう。優子は過去にダメな男ばかりを好きになってしまった経験から、「このままだと女としてまともな人生を掴めない」と思い、条件重視の婚活をするようになった。同じ過ちを繰り返さないための条件を設定し、この条件を満たした男性しか付き合わないというルールを自分に課しているため、条件に関して優子はかなり厳しい女性として描かれている。そして、桜田とは何度か合コンで鉢合わせし、優子のことを気に入っていた桜田が積極的に話しかけに行っ

は、優子にあしらわれることを繰り返す。次第に、優子と桜田は友人のような関係になり、桜田は優子に仕事の相談をし、優子は桜田にアドバイスをするようになる。こうして婚活以外の接点を持ち、交流を深めていくなかで優子は桜田に惹かれ、優子は自分から桜田に交際を持ちかける。桜田は優子が掲げていた条件に当てはまらず、不思議に思った春乃たちに優子は以下のように話している。

春乃：条件重視の婚活は？

優子：条件を変えてみたの。相手に求めるものはなくて、自分に求めるものに。

春乃：自分にとって？

優子：素直に大好きって言える自分でいられるかどうか。(中略)だって好きになっちゃったんだもん。

このように、今まで譲れなかったはずの条件を撤回し、自分の気持ちを優先した条件に変えたことが分かる。学歴などの条件を重視することをやめ、自分の気持ちに素直になったことで、優子は桜田と結ばれ、将来的には結婚するということまで関係を進めることとなる。

以上二作品は、どちらも条件を重視する婚活をしていたが、婚活で出会った人と婚活以外で接点を持つことで人間関係を維持し深めていった人と結ばれる物語であることが分かる。また、どちらも自分自身の恋愛感情を優先させ、当初掲げていた条件に当てはまらない相手を選んでいることも共通している。

『早子先生』ミカの場合、結婚願望が強く、合コンにも積極的に参加しているものの、どこか自分の理想的な相手が現れることを待っているような態度が見受けられた。そのため、婚活同盟の仲間が相手を見つけて卒業していくのを見送り、ついには早子と二人取り残されてしまう。「こうも(婚活同盟の仲間)順当な出会いをされてしまうと…」と落ち込むミカであったが、最終的には合コンで出会った十条慎介(以下：十条)と結婚に至る。十条とのなれそめを早子達に話した際、ミカは「欲しいと言わなくても手に入る人もいれば、欲しいと自分から言わないと手に入らない人もいます。30年近く生きてきて手に入っていないということは、自分は後者なんじゃないかと、ふと思ったわけです。(中略)自分から言いました。先のことは分からないけど、一緒にいたいって。」と語っている。このことから、ミカは今まで自分から行動を起こしていなかったことを反省し、自分から十条に対してアプローチを行ったことが分かる。つまり、ミカは元々主人公と比べると結婚に対して積極的ではあったが、主人公たちと同じように、より積極的に動くようになった女性として描かれているといえる。

以上より、『コンカツリカツ』の美穂や『婚カツ!』の優子は、条件を重視する婚活をやめ、自身の恋愛感情を優先するようになり、『早子先生』のミカは、より積極的に動けるようになるという変化をすることが分かった。

第四項 本命の相手との結末

婚活をしていくなかで、女性たちは本命の相手に出会う。その相手とは婚活で出会ったのかそうでないのか、結末はどうなったのかを単純にまとめると、まず婚活で出会った相手と結婚したのは、『コンカツリカツ』美穂・村尾、『婚カツ!』優子・桜田、『早子先生』ミカ・十条、梅子・岡山、舞・佐賀、『デート』依子・巧の6組となる。婚活以外で出会った相手と結婚したのは、『婚カツ!』春乃・邦之、『早子先生』亜衣子・千駄木の2組である。婚活以外で出会った相手と破局を迎えたのは、『コンカツリカツ』七海・洋介、『早子先生』早子・三田の2組である。以上より、一見すると婚活で出会った相手と結婚するケースが一番多いように見える。

しかし、既に第一節第四項や第二節第三項で述べているように、実際のストーリーを追っていくと単純に分類した場合とは異なる結果になることが分かっている。まず、メインストーリーの場合、『デート』の依子は巧と、婚活を離れ、お互いの恋愛をアドバイスし合うという関係を経ることで交際に至っているため、実際は四作品すべてが婚活から離れて物語が収束している。そしてサブストーリーであるが、『コンカツリカツ』の美穂、『婚カツ!』の優子は第二節第三項で述べた通り、美穂は村尾と仕事の都合で、優子は桜田と相談を受けたりする仲になったことで、婚活以外の接点をもったことが交際につながった。また、『早子先生』の成増梅子(以下：梅子)に関しても、出会いは婚活であるが、ストーリーを見ていくと純粋に婚活であるとは言い難いことが分かる。梅子の相手である岡山藤吾(以下：岡山)には姪がおり、その子は梅子が担当する生徒であった。岡山は姪から聞いた梅子の話から梅子に対し好感を抱いており、いつか会ってみたいと思っていた。そんな中、岡山と梅子の共通の知り合いから、二人は合コンの話を持ち掛けられる。梅子に会えるということで岡山は参加を決め、二人はついに会うことになる。実際に会ったことで改めて梅子に惹かれた岡山は、結婚を前提とした交際を申し込み、梅子も受け入れる。このように、岡山は元々梅子のことを知っており、梅子に会うために合コンを利用したに過ぎないため、純粋に婚活で出会ったとは言い難い。以上のような、実際には婚活以外の接点を持ったことで交際又は結婚に至ったものや、梅子のようなケースをまとめて「婚活以外の接点を持って結婚」とすると以下のようにまとめることができる。

婚活で結婚(2組)……………ミカ・十条、舞・佐賀
婚活以外の接点を持って結婚(4組)…美穂・村尾、優子・桜田、**依子・巧**、梅子・岡山
婚活以外で結婚(2組)……………**春乃・邦之**、亜衣子・千駄木
婚活以外で破局(2組)……………**七海・洋介**、**早子・三田**
※網掛けはメインストーリー

以上より、婚活で結婚まで至ったのは、『早子先生』のミカ・十条、舞・佐賀の2組であ

り、残りのカップルは婚活以外で本命に出会い結婚もしくは破局を迎えているということになる。

第五章 考察

第一節 ストーリー展開

今回調査した四作品は、すべて「結婚に対して消極的な主人公が、本人の意思とは関係のないところで婚活を始めることになり、婚活をしていくうちに恋愛や結婚に対して積極的になり、婚活から離れて物語が収束する。」というものがメインストーリーである。「婚活を始めるきっかけは本人の意思とは関係のないところ」という結果は、永久ら(2015)が指摘する「情緒的依存対象を得られる」という点に価値をおいて婚活を始めるといふものと異なっている。また、サブストーリーまで含めると、「婚活を経て主体的に恋愛を進められるように成長する有様」をドラマでは描いているといえる。このような物語の中で、特に筆者が重視したい点は二点ある。まず一点目は、婚活から離れて物語が収束しているという点である。婚活を題材にしているにも関わらず、物語が進むにつれて婚活の要素は薄まり、恋愛ドラマのようになっていく。第四章第二節第四項より、婚活の要素が薄まり、物語が婚活から離れていくことがほとんどだということは明らかである。このように、物語の途中から婚活が描かれなくなっていくということには、やはり理性的な活動である婚活で相手を選ぶというよりも、偶然出会った人と恋に落ちるといったような恋愛の形が理想的であるというメッセージが込められているのではないかと考えられる。第四章第一節第四項より、四作品とも最終的に描かれているのは、主人公と本命の相手の恋愛模様である。また、第四章第二節第三項より、婚活に対して積極的なキャラクターも、条件ではなく自身の恋心が最終的な決め手となっており、こちらも主人公同様描かれているのは恋愛である。では、なぜ婚活と銘打ちつつ婚活がうまくいったパターンは少なく、結局は恋愛に落ち着くのだろうか。筆者は、婚活自体は失敗してしまうということを描くことで、上昇婚を否定しているのではないかと考える。ただ単に条件で交際相手を選ぶことを否定するよりも、学歴や収入などの条件を設定し能動的に取り組まなければいけない婚活を描いたうえで、「婚活がうまくいかない」という形で婚活を否定することによって、より強く上昇婚を否定しているのである。第四章第二節第二項より、ドラマで描かれているのはほとんどが男性と女性の社会的地位が対等な場合で、上昇婚はほとんど描かれていないことから、今回調査した作品は上昇婚の物語ではないことが分かる。仮に上昇婚を描くとするならば、高収入や高学歴などの条件を満たした男性を登場させなければならない。しかし、このような男性を選んで交際又は結婚するというストーリーでは、「好きな人と結ばれる」という恋愛の形が理想というメッセージと矛盾する。条件ではなく恋愛感情を優先した恋愛を描くには、上昇婚の物語では説得力に欠けるため、上昇婚を追い求めることになりがちな婚活は物語が進むにつれて描かれなくなるということではないかと考える。これは、富士井(2006)の「時代を超えても変わらず愛されるのは上昇婚の物語である」という指摘とは異なる結果となった。

二点目は、女性が恋愛に積極的になる変化を描いているという点である。第四章第一節

第三項より、四作品とも主人公は恋愛や結婚に対して消極的な態度から積極的な態度に変化していることは明らかである。また、第四章第二節第三項より、元々結婚願望の強く、主人公と比べて結婚に対して積極的であった『早子先生』のミカも、より積極的になるという変化をしている。このように、女性が積極的に変化するというところに、婚活を描く意味があるのではないかと筆者は考える。ドラマで描かれている「女性側が積極的になることによって恋愛がうまくいく」という物語の、女性側が積極的になるきっかけの役割を婚活が果たしているのである。調査作品では、様々な婚活を始めるきっかけが描かれており、婚活に乗り気でないキャラクターも登場した。また、「いつかは自然に結婚できるもの」といった意識や、「自分から結婚相手を探しに行くのはがっついてみえる」といった意識は、自分で行動を起こしていかなければ結婚できない社会になった今も残っている。実際ドラマ内でも、「婚活はがっついていてみたいだ」といったセリフがあり、積極的に結婚相手を探すことに抵抗感があることが描かれている。このようなイメージのある婚活をあえて題材として扱い、登場人物たちが婚活に対して前向きになり、主体的に恋愛を進められるように成長する有様を描くことで、「積極的な女性」を肯定しているのではないかと考えられる。マイナスのイメージを持つ婚活に、結婚に対し消極的であった女性たちが向き合い成長していくことで、より積極性を得たことを際立たせているのである。つまり、ドラマの中心はあくまで恋愛に対して主体的に動けるように成長する女性の物語であり、婚活は女性の変化をより際立たせるためのものだと筆者は考える。

第二節 ドラマが発するメッセージ

第二章において、婚活の提唱者である山田(2010)がどのような意図をもって婚活を提唱し、実際人々にはどのように受け取られたのかについて述べた。山田が婚活を提唱することで伝えたかったメッセージは、今回調査した作品でも読み取ることはできるのだろうか。

山田が婚活を提唱することで発したメッセージと、ドラマで描かれていたことが重なる点が二つある。一つ目は、待っていても理想的な結婚相手は現れず、自分から動かなければならないという点である。山田は、人生における選択肢が増えた現代では、自分が相手に選ばれないという苦しい状況に陥ることもある。しかし、その現実を直視し、失敗を恐れず結婚を希望し、行動しなければならないのだと述べている。調査作品においては、登場してから何も行動を起こさないまま、相手とめぐり合い交際・結婚したというキャラクターは登場しない。つまり、登場人物は、程度に差はあるものの全員が何かしらの行動を起こすようになるという変化をしているのである。これは、山田の主張とドラマで描いていたものが一致しているといえる。二つ目は、婚活=高収入男性をゲットする勧めではないという点である。ドラマでは上昇婚のパターンはほとんど描かれておらず、ほとんどが女性と男性は対等であるパターンであったことから、読み取ることができる。『コンカツリカツ』の美穂は、唯一上昇婚かつ結婚まで至ったキャラクターであるが、上昇婚といえる要素は「年収が美穂の二倍」という点のみであることに加え、結局恋愛感情が結婚の決め手になっていることから、上昇婚を描くことを目的としたキャラクターではないと考えられる。また、婚活=高収入男性ゲットではないということには、性別役割分業の意識から解放され、女性に対し共働きをする覚悟を求めるというメッセージも含まれている。この点については、調査作品において結婚後も仕事を辞めたいという女性は登場せず、むしろ結婚後も仕事を続けたいという女性を描いていることから読み取ることができる。

対して、山田の思いとは異なる形で婚活が描かれていた点がある。それは、婚活=合コンともとれるような婚活の描き方をしていた点である。第四章第二節第一項より、調査作品では主に合コンに参加することを、「婚活する」として描いていたことが明らかになっている。山田は、ただ合コンに参加すればよいという考えを批判しており、出会い前に自身の魅力を高め、出会いを自分で作り出すことの重要性を説いている。自身の魅力を高めるとは、清潔感のある服装をするなど外見的な魅力もそうであるが、経済力をつけることも含まれている。経済力については、調査対象としたキャラクターのほとんどが仕事をしていることから、この点に関しては特に問題ではない。外見的な魅力については、『早子先生』の早子や、『デート』の依子が化粧などのおしゃれを研究するシーンが確認できたが、この二作品のほんのワンシーンのみであった。つまり、ドラマにおいて自身の魅力を高めているような描写はほとんど見られなかったのである。では、なぜ提唱者の批判する合コンばかりがドラマで描かれていたのだろうか。理由としては、婚活=合コンという誤解された婚活の方が人々には馴染みがあるということと、ドラマの中心が婚活とは本来こういうものだと言及するところにあるのではないということが考えられるが、「出会いを作り出す

ことの重要性」に山田が込めたメッセージが関係しているのではないかと筆者は考える。自分から合コンに参加しているならば、自ら出会いの場を作り出しているように思われる。しかし、「合コンにただ参加する」というだけでは、結局は「合コンに参加していればいつかは理想の相手に出会える」と待っていることになり、何もせず待っていることとほとんど変わりはなくなってしまふ。このような理由から山田はただ合コンに参加するという考えを批判している。しかし、出会いを作り出すということに関しては詳しく述べていない。では、出会いを作り出すとはどういうことなのだろうか。筆者は、出会いを作り出すとは人間関係を構築することを指しているのではないかと考える。婚活は相手に求める条件を設定して行うことが多く、『婚カツ!』の優子のように条件を重視しすぎてしまうこともある。そうではなく、交際・結婚を目的としない人間関係を構築することで、人脈が広がり新たな出会いが生まれたり、相手をより理解したうえで交際・結婚を考えたりすることができる。調査作品においても、第一節でも述べたように物語は婚活以外のところで収束しており、その収束する過程は人間関係を構築していく物語といえる。偶然出会った人、婚活で出会った人間わず、本命の相手となる人とは、結婚を意識せずに関係を深めていく過程が必ず描かれている。この純粹に人間関係を構築する過程を描くために、物語の途中で婚活が描かれなくなるのではないかと考えられる。

今回の調査より、婚活をテーマに扱ったドラマで描かれていたのは、結婚に対して消極的であった女性が、恋愛に対して主体的に動けるように成長する物語であると分かった。婚活は女性が積極的になるきっかけに過ぎず、きっかけとしての役割を果たした後は物語内で描かれなくなる。ドラマには、結婚に向けて積極的になる女性たちを肯定するというメッセージが込められる反面、条件等で相手を決める婚活ではなく、やはり自分が惹かれた相手と恋に落ちるといふ恋愛の形が理想だといふ女性たちの思いが込められているのではないのだろうか。女性たちは婚活を通して恋愛や結婚に対し主体的に動くことができるようになるが、女性たちが恋愛に向けて本格的に動いていくようになるきっかけのひとつは、運命的な偶然の出会いである。つまり、どれだけ女性たちが積極的になろうと、結局は運命的な出会いによって二人は結ばれるという、主体的になっただけではどうにもできない偶然の要素があることは否めないのである。婚活は主体的に動くことを女性たちに求め、そのような女性を肯定すると同時に、運命的な出会いをして恋に落ちるといふ理想的な恋愛を浮き上がらせているのである。晩婚化が進む現代において女性に求められている姿勢と、女性が追い求めたい理想の恋愛という相反するものがドラマには込められているのではないだろうか。

参考文献・URL

- 阿部孝太郎, 1997, 「テレビドラマの構造分析・序説——その方法と意義を中心に」『マス・コミュニケーション研究』 50:127-139
- 関内文乃, 2010, 「婚活ブームの二つの波——ロマンティック・ラブの終焉」山田昌弘編, 2010, 『「婚活」現象の社会学』, 東洋経済新報社, 121-159
- 永久ひさ子, 2015, 「未婚男女における結婚価値と結婚活動」永久ひさ子・寺島拓幸『文京学院大学人間学部研究紀要』 16:63-72
- 富士井彩乃, 2006, 「テレビドラマにおける現代女性の人生観——恋愛・結婚・仕事を中心に——」富山大学人文学部人文学科平成 18 年度卒業論文
- 山田昌弘・白河桃子, 2008, 『「婚活」時代』, ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 山田昌弘, 2010, 『婚活現象の社会学』, ディスカヴァー・トゥエンティワン

内閣府 平成 26 年度「結婚・家族形成に関する意識調査」報告

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h26/zentai-pdf/>

厚生労働省 人口動態統計 <http://www.mhlw.go.jp/>

『コンカツリカツ』 <http://www6.nhk.or.jp/drama/pastprog/detail.html?i=konkatsu>

『婚活！』 http://www.fujitv.co.jp/b_hp/kon-katsu/index.html

『デート～恋とはどんなものかしら～』 <http://www.fujitv.co.jp/date/index.html>

『早子先生、結婚するって本当ですか？』 <http://www.fujitv.co.jp/hayako/index.html>

